



(六代) 清水六兵衛《果実文飾皿》1935年



神坂雷住《漆画人物祭礼之図飾箱》大正期



近藤悠三《梅染付金彩壺》1983年



服部峻昇《耀貝飾箱「晩の海」》1990年



野長瀬晩花《水汲みにく女》1925年

うつわ考

京都市美術館コレクション展 第二期
2008年
4月5日(土) — 6月15日(日)
開館時間 午前9時 — 午後5時(ただし入場は4時30分まで)
休館日 月曜日(ただし5月5日は開館)
入場料 大人400円(300円) 小・中学生200円(150円)
※(入場は20名以上の団体料金 障害者の手帳等を提示の方は無料)
※(京都市在住の方 敬老乗車証等で確認)は無料 京都市内小・中学生は無料
主催 京都市

中身を空っぽにして、いつか大切なもので満たされることを待つ「うつわ」。日本の工芸の歴史を振り返ると、そのほとんどの部分が壺・鉢・皿・甕・碗など、私たちの生活の用に供する「うつわ」で占められていました。長い間、「うつわ」であることは、それが工芸であることの証となり、内部に物を容れるという「うつわ」の機能性は、「工芸」の本質的条件とみなされてきました。

「うつわ」は、用に供するよう形作られている一方、古くから鑑賞の対象にもなってきました。中世以来の螺鈿や蒔絵の手箱や硯箱は、仏具や貴族の調度品として作られながら、鑑賞品としての性格が強いものでした。

また近世に登場する、染付や色絵など表面に華やかな装飾を施した陶磁器は、使用するだけでなく、眼で愛でられることが意図された「うつわ」でした。

近代になり、工芸が、「美術」の範疇に組み入れられるようになると、使われることから見られることへと重点は移っていき、また近世に登場する、染付や色絵など表面に華やかな装飾を施した陶磁器は、使用するだけでなく、眼で愛でられることが意図された「うつわ」でした。

このように工芸が、見られることへと大きく傾斜していくと、工芸「うつわ」という、これまで当然と思われていた図式にさえ、疑問が投げかけられます。戦後には、「うつわ」の機能的な形態に制約されない、自由な立体造形を試みる動きが陶芸の分野に現れ、この傾向は、工芸の他のジャンルにも急速に広まり、作品は総じて工芸の「オブジェ」と呼ばれるようになっています。

今回のコレクション展は、このように用途と鑑賞という両面の要素をもつ工芸独特の形式、「うつわ」が、近代以降、工芸の形や在り方にとどのような影響を及ぼしてきたのか、所蔵品の工芸・絵画作品約130点を通じて探ります。

CONTAINERS, DISHES, AND VESSELS AS ART

Masterpieces from the Permanent Collection 1: April 5—June 15, 2008 (closed on Mondays except May 5) Kyoto Municipal Museum of Art



(初代) 宮水東山(帰風)
(印 錦光山)
《彩釉燕花瓶》1905年



柳原睦夫
(キ・オリベ)
1992年
花噴笑口瓶(A)



須田国太郎《陶器のある静物》1954年



黒田辰秋《屋久杉壺》1980年



(七代) 清水六兵衛《花陶壺》1987年

京都市美術館

KYOTO MUNICIPAL MUSEUM OF ART
〒606-8344 京都市左京区岡崎円御寺町124
(岡崎公園内) tel. 075 771 4107
http://www.city-kyoto.jp/bunshi/kmma/
●JR・近鉄京都駅から市バス5号系岩倉方面行/100号洛バス(急行)東山-平安神宮-銀閣寺方面行「京都都会館美術館前」下車 ●阪急烏丸駅・河原町駅・京阪三条駅から市バス5号系岩倉方面行「京都都会館美術館前」下車
●地下鉄東西線「東山駅」下車徒歩10分



- ギャラリー・トーク/日時=2008年4月19日(土), 5月24日(土) 午後2時—午後3時
- 展覧会場場で、当館学芸員による解説会を開催いたします。本展覧会入場料金でご参加いただけます。
- ワークショップ「使えそう?うつわをつくらう」/日時=2008年6月1日(日) 午後1時30分—午後4時30分
講師=上田順平(美術作家)
- 身の回りにあるものに手を加え、使えそう?使えない?うつわをつくりま。 ●対象は中学生以上、定員は20名、参加費は1,000円です。 ●はがき又はFAX(075 761 0444)で美術館までお申し込み下さい(申込多数の場合は抽選)。5月21日(木) 必着です。 ●当日必要な材料については、美術館までお問い合わせ下さい。